みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

神話に表れた民族間関係：中国西南部少数民族を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大林, 太良 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002124

神話に表れた民族間関係
― 中国西南部少数民族を中心として ―

大林太良

キーワード：神話(myth)　民族間関係(inter-ethnic relations)　兄弟関係(sibling relations)　通婚(intermarriage)　中国西南少数民族(ethnic minorities of southwestern China)

1．はじめに
2．兄弟関係によって民族間関係を語る創世神話
3．通婚による民族間関係を語る歴史伝説
4．若干の考察

1．はじめに

神話ことに創世神話においては民族間関係がしばしば語られている。これは民族間関係についてのイーミックな見方を表現したものとして興味深いものであるが、これまで本格的な研究の対象となったことを聞かない。ここではその第一歩として、若干の事例にもとづいて考察してみたい。なお民族間関係を語る神話は、この地域ではことに兄妹始祖型洪水神話において、始祖夫婦の子供たちがそれぞれ異なる民族の先祖となったという形式において、おびただしい事例が存在している。ここではそれらすべてを取り上げることは不可能なので、いくつかの見本に限らざるを得なかった。また近年、中国少数民族の神話は我が国でも紹介されているものがかなりあり、小論では大いに利用させてもらった。ここに感謝の意を述べておきたい。

事例には番号をつけ、ほぼ北から南にかけての順序で紹介する。

事例紹介ののち考察の章では、他地域の事例も比較に挙げて考えたい。

2．兄弟関係によって民族間関係を語る創世神話

［事例 1］

19世紀にユックが報告した西蕃 Si-fan（チベット族）の神話では、原初には地上にはただ一人の人間しかいなかったことになっている。この人間には子供が三人いた。彼は大変年とって死んだ。三人の子供たちは、父の死体をどうしょうかと相談したが、意見は一致しなかった。一人は棺に入れて埋めようと言い、もう一人は火葬しようと言い、第三の子供は父を山頂に放棄しようと言った。しまいに三人は死体を三分することに決めた。長男は頭と腕を貰い、この長男から漢族が発祥した。だから彼の子孫は技芸や産業で大変有名になり、利口で狡く、あらゆる策略をめぐらす。次男は胸を貰い、チベット人の始祖となった。だからチベット人は大いに心臓と勇気をもち、死を怖れず、制御されないままでいる。末子は下半身を貰い、彼からモンゴル人が起源した。彼らは長い間、東の草原を放浪し、モンゴル人は単純で、臆病で、頭も心臓もない。彼らの主な特性は、鐙(あぶみ)にしっかりと立ち、鞍のなかで着実に座ることである。だからモンゴル人は良い騎者であり、チベット人は良い戦士であり、漢族は良い商人になった(Huc und Gabet 1855:227 ; Kuhn 1935:65)[1]。

［事例 2］

戦前にルジャンドルが報告したロロ族（彝族）の神話は、三人の息子から民族が分かれた点では、いまのチベット人の神話に似ている。アプ・ウオサApou Ouosa は宇宙を創造した。天には星辰がちりばめられ、大地には植物が植えられた。最初は白い人たちがいたが、姿を消してしまった。次に黒い人たちがいたが、これも姿を消してしまった。最後に赤い人たちがいて、これが永続した。赤い男には息子が三人いた。長男は西蕃 Sifan(チベット族)、次男がロロ族、三男が漢族である(Legendre 1909:410)。チベット族の地位が高く、漢族の地位が低いのが注目される。

---

[1] なお私が所蔵するフランス語版 Huc 1925;1928 にはこの話は載っていない。普及版のせいであろうか。

［事例 3］

雲南省麗江地区納西（ナシ）族の『創世記』にも大洪水の後の民族分離が語られている。ただしこの場合、兄妹始祖の形を取っていないことと、言語の相違によって民族の分離が説明されているのが面白い。

皮袋に入って洪水を生き延びた従忍利恩（ツオンレンリエン）は、天神の娘と結婚し、三人の子をもうけた。だが三人とも唖で話すことが出来なかった。ところが偶然のことから、三人が同時に別々の声を出すようになった。長子の発した言葉はチベット語となり、彼はチベット族の祖先となった。次子の言葉は納西語となり、彼は納西族の祖先になった。そして末子の言葉は白（バイ）語となり、彼は白族の祖先となった（伊藤　1989:34－35）。

［事例 4］

雲南省の独竜（ドウロン）族の神話《兄弟倆》によると、大洪水の後、生き残った兄妹は結婚し、九人の男児と九人の女児を生んだ。

「長男と長女は東方に赴き漢族となった。次男と次女は原地に留まり独竜族になり、三男と三女は北方に行き蔵（ツアン）族になった。四男・四女と五男・五女は西方に赴きビルマに住んだ。六男と六女は南方に行き怒（ヌ）族になった。第七・八・九の弟妹たちはどちらに赴いたかわからない」（伊藤　1989:43）。

［事例 5］

民族間の対立は、始祖兄弟間の対立として語られることがある。

たとえば、湖南省湘西地区花垣県排碧郷の王岩村では養鶏をしない。百田弥栄子によると、仡索（コスオ）つまり、雷神で苗族の祖先には、仡畢（コピ）つまり漢人の祖先という兄弟がいた。二人は仲が悪くて喧嘩ばかりしていた。あるとき、どちらが強いかで争いになり、穀物倉で互いに枕を選んで寝て、その枕を駄目にしたら倉を出る、早い方が勝ちということになった。コピは磁石を枕にした。雷神は賢くて、鉄なら錆びると考えて、鉄塊を枕にした。

これで雷神が先に倉から出たなら、何の問題も起こらなかった。問題は倉の隣の家が鶏を飼っていて、それをコピが計算に入れていたことである。コスオが寝ていると、後

頭部に鶏の尿がかかって、そこが腐ってしまった。雷神は怒って、ぱっと外に出ると、大風を起し、大雨を降らせ、稲妻を走らせ、雷を轟かせながら天へ去ってしまった（百田　1999:245）。

［事例 6］

蘇東椰の報告したヤオ族の創世神話によると、ある年の旧暦5月29日に、プロシ山とミロト山という二つの山が裂け、プロシ山がから男性、ミロト山から女性が現れ、それぞれプロシ、ミロトと呼ばれるようになった。ある日、プロシは「わしは天下のすべての山と川を治めてから帰る、ミロトは家にいて、三人の娘を育ててくれ。娘たちが大きくなったら、それぞれ好きな道を歩ませたらよい」と言って遠方に出掛けた。

ミロトは家をしっかり守るかたわら、神の住む地方に行って、さまざまな種子を求めて帰った。そして、山の斜面を樹木、野山に花の種子を蒔き、平地には五穀の種子を作った。ミロトは六日働いて一日の休息をとった。そのほか泥でさまざまな形をした獣を作り、六つの甕に入れた。これは動物の誕生であって、鶏、鳥、兎が誕生し、70日すると犬と猫が、120日すると猪と羊が、270日すると牛が、360日すると馬が誕生した。こうして六つの甕からは42匹の生命がはぐくまれた。

三人の娘は大きくなり、独り立ちできるようになり、ミロトはある日それを認めた。

翌朝、上の娘は真っ先に起きると、犁をかついで平原に向かい、大地を耕し始めた。後に子供を生み、孫ができて、現在の漢族の先祖になった。漢族は体が大きくがっしりしており、働き者だから、豊かな暮らしをしている。

次に起きたのは二番目の娘で、本を天秤棒で担うと家を後にした。その子孫はチワン族である。整った顔とおとなしい性格、何をやらせても器用にこなす才能をもち、楽器を奏で、詩を詠み、絵を描き、歌や踊りもうまい。

三番目の娘は太陽が高く昇ってから起き出した。見ると家のなかには目ぼしいものは何もなかった。ミロトは娘に、まだ粟が一斗(9リットル)ほど残っているから、山に持って行って蒔きなさい、と助言した。しかし粟は稔ると鳥に食べられてしまった。母は家にある銅皷を持ってやまへ行けと言った。銅皷を鳴らして淋しさをまぎらわし、鳥獣の害から家畜や作物を守った。

正月や祭りの日には、漢族やチワン族の兄弟、姉妹を呼んで粟酒を振る舞い、銅皷を鳴

らして歌ったり踊ったりした。何か災難がふりかかったときには、銅皷を鳴らせば、漢族やチワン族の兄弟がすぐ駆けつけてくれた。こうして三番目の娘は山に住み着き、ヤオ族の祖先となり、銅皷はヤオ族の家宝になった。

ミロトは年とると三人の娘を呼び集め、「5月29日は私の誕生日だから、御馳走をもってくるように」と言った。末の娘は母に何を持って来たらよいかと相談すると、「粟酒を一甕と、新しい麻を少々持ってくるように、また誕生日の三日前に銅皷を持って来て、皆でにぎやかに遊ぼう」とのことであった。

三番目の娘はその通りした。ダヌー祭ず旧暦の5月26日から29日にかけておこなわれる所以である。各民族の母であるミロトを偲ぶ祭りで、ヤオはどの家でもミロトへ麻を供える。29日には、鶏や羊をつぶし、酒を運んで、銅皷を鳴らして、歌ったり踊ったりして一日を過ごす。ダヌー祭はヤオ族の、年に一度の大祭であり、各民族のきずなを強める集いでもある(黄1982:245-248; 石川 1989:166-171)。

[事例 7]

百田弥栄子が採集した広西チワン族自治区金秀県大瑤山の神話によると、張天師は雷王を捕らえた。塩漬けにしようと思ったが、塩が切れていたので、子供たちに「竹籠のなかの雷王には水を飲ませるな」と言って出て行った。雷王は水を欲しがったが、留守番の兄妹は与えなかった。それでも可哀想になり、茶碗や瓜を洗うヘチマを与えた。雷はヘチマに残った水気を吸い、兄妹にお礼に瓜の種を与え昇天した。大洪水になり張天師は死に、瓜にこもった兄妹だけが助かった。

「兄妹は結婚し、やがてヒョウタンが生まれた。兄妹は刀で瓜を二つに割ると、瓜の種がびっしり入っていたので、あちこち蒔いた。すると翌日、そこから煙が立ち昇った。種は人に変じて苗族と漢族と瑤族の祖となった。漢族は平地に行き、瑤族は山に入って山子瑤(シャンツヤオ)、拗瑤(アオヤオ)、茶山瑤(チャシャンヤオ)となった」(百田 1999: 101-102)。

[事例 8]

海南島黎族の起源神話も、大洪水を生き延びた兄妹が結婚したことになっている。二人の間には8男8女が生まれた。子供たちが大きくなると、二人は男の子には髪型を変

えさせ、女の子には顔に入れ墨をさせて、結婚相手を自分で探すように諭した。もし相手を見つけたら、そこで家を作って暮らし、両親のところへは、二度と帰ってきてはいけない、と言い渡した。こうして杞（チー）族、倖（シャオ）族、美孚（メイフ）族、生鉄（ションティエ）族、自強（ツーチャン）族、羅忽（ルオフー）族、抱由（パオヨウ）族などの部族ができた。ただ末の二人はまだ幼かったので、両親のもとに止まり、のちに三星（サンシン）族の祖になった（王　1980:17-21;君島　1983:195-199)。男の髪形、女の入れ墨の模様の相違によって、黎族の諸支族が区別されるのである。

[事例 9]

哈尼(ハニ)族の起源神話は、傣（タイ)族との友好的な関係と、棲み分けを説明している。

昔、愛尼(アイニ)人、つまりハニ族の一支族とタイ族の先祖は同じ家に住んでいた。タイが兄で、アイニが弟だった。兄弟は仲良く、当時は山地も平地もともに兄弟のものだったから、アイニのものとタイのものとの区別はなかった。

しかし年月の経つうちに子孫も殖え、兄弟は相談して二つの場所に分かれて住むことにした。土地を分けるにあたって、兄弟は互いに譲り合って埒があかないので、兄弟はは家に飼っていた二匹の家畜を使って土地の配分をすることにした。ラバが兄の家を代表し、アカシカが弟の家を代表し、それぞれの動物が歩き回ったところを、その家の土地にすることにした。すると、ラバは平地の方に駆け出し、川のほとりの草を食べ始め、アカシカは林の中に跳び込んで草地を見つけた。こうして兄は魚の棲む川がある平地をもらい、弟は鳥や獣のいる高山をもらった。

分家の日、女たちは上着とスカートの布も分けることにした。上着の布を分けるとき、タイの兄嫁はほんの少しの布地を自分がもらい、残りを全部アイニの弟嫁にもたせてやった。それを済まなく思ったアイニの弟嫁は、スカートの布を分けるときには、自分はほんの僅かの布をもらい、あとは全部兄嫁のために残した。タイ族の女が、身体にぴったりした小さな上着を着、長いスカートをはき、アイニ族の女が、ゆったりした上着と小さくて短いプリーツ・スカートをはくのは、このためである。

タイの兄とアイニの弟は、分かれ済んでも兄弟のよしみを忘れなかった。兄は川で魚やエビをとると、一部を弟に送り届けてやり、弟はやまで野生の動物を仕留めると、その一部

を麓の兄のところに届けた。

その後、今日にいたるまでアイニとタイは互いに兄弟と呼び合っている。タイ族の人が火を燃やすとき、三角架の一方をあけておくのは、アイニの人たちが来て、火を焚くことができるようにとの計らいだという（雲南人民出版社　1984；永田耕作 1990:147-149)。

[事例 10]

北部インドシナには、漢族の狡さを語る起源神話もある。ターイThay族の神話によると、昔、ルアン・プラバンに、牙が圏を作るように弯曲した象が一頭いた。この象の主人は金持ちで、国中で一番金持ちで、週諸民族の祖先になる運命の首長だった。彼にはたくさん子供がいた。天の精霊は、それら子供それぞれに名前を与えたが、それは彼らの子孫の諸民族の名前にもなった。長男はケオ Keo といい、他の子供たちは、漢 Han, ルー Lu, ポー Po, シェク Chek、カーメオ Kha Meoなどと言った。これらの名はすべてターイ族に知られている民族の名であって、そのうちのいくつかは、カー族のようにターイ族と混じり合って暮らしている。これらすべての若い人たちの父が病床についたとき、彼は子供たちを呼び集めて言った。「象が死んだとき、それが頭を向けた方向に、長男は大王国を建設し、最も強力で最も富んだ者になる」。　さて、象が死んだ日、漢が見張りの当番だった。象は頭を中国に向けた。「これが一番富んでいる国だ。俺のものにしなくては」と狡い若者は言った。彼は力任せに巨獣の頭を安南(ベトナム)に向けるのに成功した。こうして彼の兄のケオは、騙されてこの国に行った。だから安南とトンキンは繁栄しているにもかかわらず、いつも中国にやられてしまうのだ。そして今日もなお、安南人たちは、中国人に呼びかけるとき、シュ Chu（私のオジ、私の父の弟）という称号を与えるのである(Bourlet 1907:925)。ターイ族の目からみれば、ベトナム人が長男で一番偉いのに、狡い漢族が優位に立っているのは不当だというわけである。

[事例 11]

民族間の相違が皮膚の色の相違として認められている例は、中国南部から東南アジア大陸部にかけて少なくない。ミャンマーのシャン族の神話ではこうなっている。

世界を創造した四人の神が、我々人間の先祖の男女を創った。おのおのの神が、まず男と女を一人ずつ創った。これらの人間の躯体は、湿った土で造られ、それを乾かすために、

天上界の火の周囲に、神々がそれらを立てた。そこで人間の体内に熱というものが入った。そのうち、男一人と女一人をまず火のかたわらから除けたので、白人が出来た。次の男女一組は、もう少し長く火の側に置かれたので、少し色が着いた。シャン人や漢族などの皮膚の色はこれである。ビルマ人や全く皮膚の色の濃い人種は、さらによく焼けた一組の子孫であり、最後の一組は、非常に長く火の側にいたので、すっかり焦げてしまい、それゆえ黒人がいるのだ。

最初の男女には、神が息を吹き込んで生命を授けた。これは今日も同ようで、我々の身体から神の息が取り去られると、我々は死ぬのである(Milne 1910:204f.;ミルン 1944:238)。

[事例 12]

ミャンマーのワ族の起源神話には数種あるが(Obayashi 1966)、そのなかで比較的新しい形式と思われるものに、瓢箪から人間が出た形式がある。男が二つの瓢箪を切り開いた。最初の瓢箪の中には地上のあらゆる動物が入っていた。もう一つには人間が入っていた。大きな瓢箪から出てきた人間は60民族もあり、それらは四類に分かれた。米を食べて暮らす者たち、トウモロコシを食べて暮らす者たち、肉を食べて暮らす者たち、根を食べて暮らす者たちである。それぞれ自分の言語、衣服、生活様式をもっていた。これらからヤンYang(カレン)族の5クラン、ポーン Pawng族 (彼らが誰か分からない) の2クラン、タイTai(シャン)族、フケHke族(漢族)の6クラン、フパイ Hpai族(これまた不詳)、フケ族でもタイ族でもない2クラン、そしてフピル・イェッカ Hpilu Yekka の13クランである(Scott 1918: 288-292)。

この例で面白いのは、誰だか不詳の民族が二つ出てくることである。考えうることは、記録が不十分でないとすれば、この神話はかなり前の時代における民族間関係を反映しているために、接触があったがもうそれが誰であるのか不明になった民族が二つもあるということかも知れない。

3. 通婚による民族間関係を語る歴史伝説

民族間関係を語る神話伝説は創世神話だけでない。人間社会が開始して長い時間が経

ったのち、民族間の関係が通婚によって固められ、あるいはそれは見せかけにしか過ぎなかったことを語る伝説も少なくない。

［事例 13］

まず単純に通婚が二民族間の関係を固めたとする形式がある。プイ族の《鴨村》（鴨児寨）という伝説は、プイ族と漢族との間の友好的関係を謳っている。

「村の両側にある二つの山を見ると、いかにも夫婦（めおと）ふたりのように感じられる。古老の話によると、左側の山はわがプイ族の良き息子アーサンで、右側のはこの辺のプイ族に幸せをもたらしてくれた漢民族のある娘の化身だという。そして、この二人の魂が、鴨村の幸福をずっと守ってくれているのだ」（陶、莫 1983:149-158; 今井 1989;377-393）。

［事例 14］

また努力にも拘わらず悲劇に終わる例もある。

たとえばナシ族の《竜女樹》という伝説は、麗江のナシ族の木天王が、プミ族とナシ族が一緒に住んでいる永寧を自領にしょうとしたことが語られている。木天王の娘と北王（プミ族）とが結婚したが、木天王の政治的野心のため、結局、夫婦は殺されてしまった。この伝説では、王女はナシ族とプミ族とのかけ橋になろうとして結婚し、努力したことになっている（陶、莫 1983:351-356;今井 1989:275-284）。

［事例 15］

雲南省南部平地のタイ族と山地のワ族との関係は通婚によって説明される。その一つは良い状態として描かれている。

雲南省孟連（モンレン）のタイ族は、800年前に瑞麗（ルイリー）から移住してきたという。国覓ぎに来たタイ族の王子は、途中で西盟（シーモン）のワ族の村を通りかかった。ワ族の長老には三人の娘がいたが、三番目の娘の愛想がよかったので、王子はこの娘と結婚することにした。王子はこの村に留まり、ワ族の長老を助けてこの地を治めたほか、人々に牛で畑を耕すことを教えた。タイ族とワ族は三年毎に贈り物を交換し、仲良く暮らすようになった。

その後、瑞麗から数千人のタイ族が移住してきたが、最初は森林を切り開いて畑を耕して生活していた。ある日のこと、白い牛が身体に沢山の水草をつけて帰ってきた。翌日、この牛の後をつけて行くと、現在の孟連の盆地に辿り着いた。そこは水草の生い茂る肥沃な場所で、水田を開くことができ、タイ族にとって理想的な場所であった。タイ族の長老とワ族の長老は相談をし、ワ族は山で畑を耕すことになり、これは狩猟にも好都合だった。他方、タイ族は水田を耕すことになった。両者は誓いを立て、洪水の及ぶ場所はタイ族のもの、焼畑の火が及ぶ場所はワ族のものとなった。タイ族は急速に豊かになり、ついには各民族の支配者になった。

この伝説を紹介した松本光太郎は次のように付け加えた。「ここで重要なことは、現在のタイ族は水稲耕作を行う農耕民族であるが、この話のなかでは、むしろ牛を使うことに長けた牧畜民として登場していることである」(松本 1998:223-224)。興味深い指摘であるが、ここではその問題に立ち入る余裕はない。ここでは、異なる生業形態にもとづく棲み分けが語られていることが重要である。

[事例 16]

しかし結婚がじつは策略だったという伝説もある。

雲南省耿馬(ゲンマー)におけるタイ族とワ族との関係については、次のような伝説がある。明朝が辺境を征服した際、戦いに敗れたタイ族は住む場所を求めて、ワ族の長老の治める耿馬にやってきた。タイは初めはワ族の長老の支配を受けていたが、やがてその奪おうと考えるようになり、まず長老の娘と結婚することにした。やがて長老の娘が病気になると、タイ人はワ族の長老のもつ金印を洗った水を飲まないと治らないと言って、ついに金印を奪い取ってしまった。

金印を得たタイ族は、自由に兵士や食料を徴発するようになり、ついにはワ族に対して戦争を仕掛けた。戦いは熾烈を極めたが、勝負は着かず、多数の死傷者が出た。ついに和平交渉が行われ、ワ族が山の上に退くことで話がついた。これ以来、タイ族がこの地の支配者になった。

この伝説に、松本光太郎はこうつけ加えている。「この金印は、実際にはタイ族が中央王朝から与えられた金印の事だと思われるが、重要なのはこの金印がワ族から譲られたとされていることである」(松本 1998:224)。

4．若干の考察

人々は一定の基準に従って民族を分類している。しかしその基準は民族により、地域により決して同じではない。兄弟関係の神話に現れた分類基準を見ると、それはかなり多様である。何を基準として選ぶかは、その民族における、民族とは何かという問題に一つの手掛かりを与えている。その基準は次ぎのとおりである。

a	身体の部分	事例	1	チベット族
b	皮膚の色	事例	11	シャン族
c	言語	事例	3	ナシ族
d	食物	事例	12	ワ族
e	居住地の自然、棲み分け	事例	6	ヤオ族、7 ヤオ族、9 ハニ族、
f	服飾	事例	8	黎族(髪型、入れ墨)、9 ハニ族(スカート)
g	死体処理法	事例	1	チベット族

ここに紹介した事例に現れた基準のうち、チベット族の死体処理の形式による分類は、世界的に見ても珍しいものである。しかし、それは同時に、チベット族にところにおいて、葬法がもつ重要性を物語っている。 しかしその他の基準は、大なり小なり世界の他の地域にも見られるものである。いくつかについて例を挙げて説明しよう。

言語による相違は『旧約聖書』創世記第11章のバベルの塔の伝説にも出てくる。人々は天に届く塔のある町を作った。

「主は降って来て、人の子らが建てた塔のあるこの町を見て、言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いに言葉が聞き分けられぬようにしていまおう。」

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた」(11:5-8)。

皮膚の色による民族区別は、インドシナ北部には少なくない。たとえばモン=クメール系のクム Khmu 族の洪水神話の結末はこうなっている。

大洪水を生き延びた兄と妹は結婚し、妹は三年間妊娠し、子供の代わりに二つの大きなカボチャを生んだ。二人はこれをどうしたらよいか判らず、長い間、米つき臼の隣に放って

おいた。ある日のこと、妹は疲れて臼をひっくりかえし、臼は一つのカボチャをこわした。すると中から大勢の民族が出てきた。タイ Tay、ラオ Lao、ニュオーン Nhuonsの諸民族の先祖であった。火で熱した彫刻刀で妹は、もう一つのカボチャに穴を開けた。この穴からクム族が出てきたが、鉄の熱によって、最初のカボチャから出てきた近くに住む身内よりも黒い皮膚の色をしていた。こうして大地にはまた新たに人間が住むようになった。このカボチャの皮は、今日に至るまでタウ=プン Tau-pung 付近の大きな石として見ることができる。これら石の隣にはまだ一本のイチヂクの木があるが、最初の両親はこの木の下で暮らしたのであった(Roux et Tran 1927:177-178)。

これを見ても分かるように、皮膚の色による民族分類は、細かい分類には適していない。色の比較的白い民族として、タイ族、ラオ族、ニュオーン族が一括されているのである。これに対して、植民地状況下におけるアフリカでの黒人と白人の区別のような場合には、極めて有効な大分類である。

ニアサ湖畔のモラウィMorawi族は、人類の起源についてこう語っている。最古の人類は大地の中心(地中)にいた。彼らはみな皮膚が黒かった。彼らが別々に分かれて行ったとき、彼らはまず、身体を洗うために、一つの川を渉らねばならなかった。不幸にも黒人の先祖はすっかり寝込んでしまい、目が覚めたときには、他の者たちはすでに川の向こう側にいた。そして水で洗われて、清潔で色白になっていた。黒人の祖先は川に急いだ。しかし愕然としたことに、河床はすっかり干上がっていて、いくつか水溜まりが残っているだけだった。黒人の祖先たちは慌てて水溜まりに入った。その結果、彼らの掌と足の裏が濡れ、それによってそこが少し白くなった　(Czimmermann 1887:51, Frobenius 1898:281-182に引用)。

兄弟関係、通婚関係の両者を通じて多いのは、山地と平地というように、異なる生態学的領域への分住と棲み分け、それに応じての文化、たとえば食物の相違が説明されていることである。

生態学的領域への棲み分けはあまり表面に出さず、食物の相違を強調しているのはインド文明圏の特徴である。そして植民地時代に採集された話では、これによって植民地領有者イギリス人の位置付けも行われている。

チョタ・ナグプールのホー Ho 族の創世神話によると、最初の父母が一二人の息子と一二人の娘を生んだ。そのときシン・ボンガ Sing-bonga 神は水牛肉、牛肉、山羊肉、羊肉、豚肉、鶏肉、野菜の宴会を用意した。そして息子と娘を対に分け、彼は子供たちに、世界の中

に出て行くに先立って、欲しい食物の種類を選ばせた。最初の対と二番目の対は牛肉と水牛肉を選んだ。彼らはホー族の先祖だった。次にブミジ Bhimij族は野菜だけをとり、ブラフマンとクシャトリヤの先祖になった。他の対たちは山羊肉と魚(?)をとり、その子孫はスードラである。一対は貝をとり、ブイヤ Bhuiya 族になった。二対は豚肉をとり、彼らはサンタルSantal族の先祖である。一対は何ももらわなかった。ホー族はこれを見ると、自分たちの食べ残しを彼らに与えた。この対の子孫はガシ Ghasi 族、つまり コル Kol 族の村々での召し使いであり、今に至るまでコールハン Kolhan のホー族によって、扶養されている。

こうしてこれらすべての対は、世界に出発し、別々に住み、暮らし、人数は極度に増えた。そしてシン・ボンガは遠くの国々に住む者には別の言語を教え、別々の職業の人々には彼らの道具を与えた。この後、彼らの年長者の家、コル族からイギリス人が分派し、彼らもまた去勢雄牛の肉を食べるのである。しかしイギリス人が年上の子供で、コル族のほうが年下である (Tickell 1840:649ff,798)。 ワ族の場合、シャン族などを通じてインド高文化の影響もある程度およんでいるが、ここで取り上げた神話における食物による民族分類は、この地域に伝統的な、棲み分け型がインド文明の影響によって変化してできたものかも知れない。

兄弟関係によって民族間関係を説明する場合、長幼の序が民族間の序列を表していると見ることができる、したがって、長男は最も高い地位を占めることになる。たとえば、中部ベトナムの山地民バナール Bahnar 族の場合、大洪水の直後ではなくて、その後、天に達する塔を建てようとしたとき、混乱が生じたことから、さまざまな民族が発生したという。災いを避けるため人々は地上のあらゆる方向に散らばった。バナール族の言うところでは、ある者はバナール族の国に亡命し、ある者はセダン Sedang 族、ルウンガオReungao族、ジャライ Jarai 族などの先祖となった。長男は両親のところに留まり、ベトナム人の起源となった。だからベトナム人は山の諸民族よりも賢く、富んでいるのだ (Guerlach Bahnars 1887:490、Frazer and Downie 1939 :63 に引用)。

なお、兄弟関係は必ずしも友好関係を意味するものではない。仲の悪い兄弟がいるように、憎悪の対象の民族も兄弟民族のなかには含まれているのである。ことに漢族の狡さが指摘されているものがいくつかあるのが目をひく。事例 1(チベット族)、5(苗族)、10(タイ族)がそれである。

ここでは兄弟関係の神話ではないが、比較のためにウクライナ人の《神様が世界を創造なさったとき》という民間神話を紹介しよう。 それは支配者民族ないし優越民族に対する批判を含んでいる点では、中国南部からインドシナ北部の神話と同じだが、しかもこの地域には類を見ないユーモラスな話に仕上げられた珠玉の逸品である。

神様が世界を創造したとき、一時にいろいろな民族を創造した。トルコ人、タタール人、ドイツ人、ルテニア人だが、ロシア人だけはまだいなかった。そこへ聖ペテロがやって来て、「もうどの民族もそろっていますから、ロシア人も造ってやって下さい」と言った。

「何のために必要なのだ　？」

「とにかく、いればいいんです」

「よければ、行ってそこの石を持ち上げるがよい」

聖ペテロが石を持ち上げるや否や、その下からロシア人が一人跳び出て来た。聖ペテロの髭をつかみ、「どこから来た、旅券をもっているのか」と言った。

「持っていません」

「では警察に来い」

聖ペテロは神様のところに走って行って、ロシア人がうるさいことを言って困ると訴えた。神は、「お前がロシア人を欲しがったのだから、自分で何とかしろ」、と言った。聖ペテロは、ロシア人を厄介払いするために、なにがしかの酒手をやらなければならなかった。

それからはロシア人は旅券のない人間を悩ましている。それまでは旅券とは何かを知っている者は誰もおらず、誰でも好きなところに行き、どこへ行ってよいかと人に尋ねたりはしなかったのだ (Mykytiuk 1979:Nr.42;関 1985:285-286)。

これらの神話伝説は、民族間関係の歴史について多くの示唆を与えてくれる。ワ族(事例12のように、もう誰だか忘れられてしまった民族との接触の記憶を留めた話もあるし、ナシ族(事例 3)やロロ族(事例 2)のようにチベット族の地位が高く、漢族は出てこないか、出ていても地位の低かった時代を反映した神話もある。他方、ヤオ族(事例 6)のように、漢族を姉とし、妹たちの子孫の民族もみな友好関係にあるという、中華人民共和国の公式の立場に即応した例も、一つの歴史的ドキュメントである。

最後に、自民族を中心として民族間関係が兄弟関係によって語られているとき、この範

囲に入る民族と、その外の民族という、同心円的な構造が考えられる。民族間関係の同心円的な構造というと、東南アジアでは、首狩をする範囲と、その外という構造が前から知られている(Barton 1938)。創世神話において兄弟関係が認められている範囲とその外は、民族間関係の同心円的な構造として、これと並んで重要なものである。

引用文献

Barton, Roy Franklin

1938 Philippine Pagans: The Autobiographies of Three Ifugaos. London: George Routledge and Sons.

Bourlet, Antoine

1907 Les Thay, in: Anthropos, 2 : 355-373, 613-632, 921-932.

Czimmermann

1887-1888 in: Katholische Missionen, Freiburg.

Frazer, J.G., and R. A. Downie

1939 Anthologia Anthropologia. The Native Races of Asia and Europe. London: Percy Lund Humphries & Co.,Ltd.

Frobenius, Leo

1898 Die Weltanschuung der Naturvolker. Weimar: Verlag von Emil Felber.

Guerlach, J.B.

1894 Chez les sauvages de la Cochinchine orientale: Bahnar, Reungao, Sedang, in: Missions Catholiques, 26:9-12, 21-24, 46-48, 70-71, 81-83, 94-96, 107-108, 115-118, 132-134, 140-144, 157-160, 169-172, 182-183, 193-195, 206-208, 219-220, 241-243.

Huc, R.P.

1925-1928 Souvenirs d'un voyage dans la Tartarie, le Thibet et la Chine. 4 vols. Nouvelle édition publié et préfacée par H.D'Ardenne de Tizac. Paris: Libraire Plon.

Huc, R., und Gabet

1855 Wanderungen durch die Mongolei nach Thibet, hrsg. von Karl Andree. Leipzig.

今井喜昭(訳)

1989　『中国少数民族の間に語りつがれている愛の物語』北京:外文出版社

石川鶴矢子

1989　『石の羊と黄河の神 中国の民話』＝ちくまプリマーブックス 28)，東京:筑摩書房

伊藤清司

1989　「二度の人類起源－中国西南少数民族の創世神話－」君島久子編『東アジアの創世神話』28-52, 東京: 弘文堂

君島久子

1983　『中国の神話　天地を分けた巨人』(世界の神話 7), 東京: 筑摩書房

黄泊淪

1982　『節日的伝説』　長沙: 湖南人民出版社

Kühn, Alfred

1935　Berichte über den Weltanfang bei den Indo-chinesen und ihren Nachbarvolkern. Ein Beitrag zur Mythologie des Fernen Ostens. Leipzig: Otto Harrassowitz.

Legendre, A.F.

1909　Far West Chinois. Races aborigénes. Les Lolos. Etude ethnologique et anthropologique, in: T'oung Pao, 2. Série, 10:340-444, 603-665.

松本光太郎

1998　「古代王権と『異形』の人々」『歴史読本』 43(9): 220-225

Milne, Leslie

1910　Shans at Home. London: John Murray.

ミルン著、牧野巽、佐藤利子訳

1944　『シャン民俗誌』東京: 生活社

百田弥栄子

1999　『中国の伝承曼荼羅』東京: 三弥井書店

Mykytiuk, Bohdan

1979 Ukrainische Märchen (Märchen der Weltliteratur). Düsseldorf: Eugen Diederichs Verlag.

永田耕作(編訳)

1990 『中国のむかし話 2 』(偕成社文庫 3171), 東京: 偕成社

王越

1980 『五指山伝説 海南島黎族民間故事選』 広州: 広東人民出版社

Obayashi, Taryo

1966 Anthropogonic Myths of Wa in Northern Indo-China, in: Hitotsubashi Journal of Social Studies, 3(1):43-66.

Roux, H., et Tran-Van-Chu

1927 Les Tsa Khmu, in: Bulletin de l'Ecole Francaise d'Extreme-Orient, 27: 169-222.

Scott, James George

1918 Indo-Chinese, in: The Mythology of All Races, 12: 247-357, 429-430, 448-450. Boston: Marshall Jones.

関楠生(訳)

1985 『世界の民話 27 ウクライナ』 東京:ぎょうせい

Tickell, Lieut.-Col.

1840 Memoir on the Hodesum improperly called Kolehan, in: Journal of the Asiatic Society of Bengal(old Series), 9(104).

陶立璠 、莫福山

1983 『中国少数民族愛情故事選』 蘭州: 甘粛人民出版社

雲南人民出版社

『哈尼族民間故事』 昆明: 雲南人民出版社